

集大成として

先日、卒業論文を書き上げ、口頭試問を経て単位認定をいただきました。卒業論文の執筆は大学における目標の一つであったので、これで悔いなく東京大学の卒業を迎えることができるというものです。

そもそも、東京大学の経済学部は卒業論文制作が必須ではありません。「大学生たるもの卒論を書くべき」と考えていたので、これを知ったときは正直驚きました。実は経済学部だけでなく法学部、理学部、医学部(一部)なども必要ではないらしいです。東大以外にも案外多いとのこと。通説では、学部レベルでは学術研究なんかできない、という理由だそうです。

いやいやいや、と思いつつ、論文執筆を二度行った身としては、簡単に反論できるものではないと感じます。大会用論文と卒業論文の制作を通して、論文を「学術論文」として書き上げる難しさを深く実感したからです。

大学3年の時、「国際ビジネス研究インターカレッジ大会」という、学術論文の全国大会出場のためにチームで論文制作を行いました。まずテーマの策定から始めるのですが、6人がテーマ案を持ち寄っても持ち寄っても「すでに先行研究がある」「学術的研究として不適切」「単純に研究として面白みがない」といった理由でぐだぐだと時間が進んでしまいました。話し合いを始めた5月から論文提出締切の11月までの間で、2/3はテーマ決めに時間を使っていたと思います。論文制作として計画が破綻しているとは思いますが、それくらい、学術研究の「入り口に立つ」ことすら難しいのだと感じました。とにかく英語論文を読み漁る中で、その研究を理解するのに多く時間を要しました。知らない用語、知らない前提知識、知らない研究手法だらけで、自身の無知さを思い知りました。

最終的には、大会で優勝することができました。しかし、かなり教授の助力が大きく、研究方法、データ分析、因果推論、論文執筆に至るまで、自分たちだけでは力及ばずであったと認識しています。論文執筆というのはこんなにも難しいことかと、いかに(先行研究のツギハギと独自の無責任な視点による)レポートとは違うか、ということに身を染みて感じました。

そのような中でも卒業論文を書こうと前向きになったのは、卒業するからには、という思い以外に、未熟ながらも論文執筆の意義を感じたことが大きいように思います。論文制作を通じて、基本的な研究の進め方や論文の書き方について学んだだけでなく、仮説思考、論理思考、批判思考などを多少なりとも身につけることができたと感じているからです。そして、論文制作の達成感は何ものにも代え難い、ということも知りました。

結論でいうと、私の卒業論文は学術的には評価できるものではありません。教授にも「テーマとして面白い」「先行研究が少ない中でよく書いている」と評価していただいた反面、「もっと定性データを引き出せた」「因果推論が弱い」などのご指摘をいただきました。自身の最善を尽くした結果として受け止めると共に、改めて学術的研究の厳しさを垣間見ました。

しかし総じて、卒業論文は書くべきであると思います。学術的研究として学術の発展に1ミリも寄与することができなかりと、大学4年間の集大成として自身の努力を形あるものに残すのは意義高いことと考えます。また、論文制作はその過程が学びの宝庫であると考えているので、「学部レベル」でも決してお遊びではない、そう思っています。

主旨とはずれますが、自身の卒業論文で得た知見を少し共有させていただこうと思います。

卒業論文のテーマは、「就職活動の早期化による企業への影響とは何か」です。これまでに体系的な研究がされてこなかった領域、ということもありますが、自身が良くも悪くも就職活動の早期化及び早期内定出しに影響されてきたので、実体験から生まれた純粋な疑問でした。企業はどのような想いで早期化をしているのか。就職活動の早期化によって企業にどのようなメリットとデメリットがもたらされ、企業はどのように対応しているのか。早期化に対する反骨心を一部抱きながら、企業の人事の方々にご協力いただき、インタビューを行いました。

その中で得た意見の中で印象的だったのが、ある企業の人事の方が、就職活動の早期化により内定辞退が増加していることに対して、「(学生が)最終的にうちを選ばなくてもいい、その人がうちと出会って成長できたと言えるんだったらいいよね」とお話しなされたことです。

自身が就活をしているとき、就活が「自分のためになる」という思考はあまりなかったように思います。正直、「就活を必死にやっても第一志望に内定貰えなければ全部無駄じゃないか」とまで思っていました。早期化という現状は焦りと不安の要因で

しかなかった。しかし後から振り返ってみると、「いろんな業界、企業を知れたな」「初めて自分の行きたい方向性を絞れたな」「なんだか度胸がついたな」など、就活で得られたものは多かったと感じます。特に将来何がしたいのかも分からなかった自分にとって、早期から社会と接点を持って、幅広い企業を見て悩むことができたのは、それこそ早期化の恩恵でした。

「就職活動の早期化」は学生にも企業にも弊害を与え、多くの場合は悪として捉えられています。しかし早期化に対して肯定的な企業の方も多く、その方々は一律に「学生のためになる」という話をしてくださいました。特に、学生が大学1,2年からでも「自分を知る」「社会を知る」機会が豊富である点は、早期化が社会に与える最大のメリットと考えます。より産学連携して学生の就職活動を後援し、企業とのマッチングを高めていけるように移行していく必要があると感じました。

ただ同時に、企業は早期化のスピードに対応が追いついていないのが現状です。その課題克服には是非とも取り組んでいきたいと感じました。今まで人事のポジションは考えになかったのですが、今回の件を通して強く興味を持ちました。人事でないとしても採用活動には積極的に関わり、次世代の産業を支える人材の育成に携わっていききたいと思います。

末筆ながら、このように私が論文の制作のみならず、学業やサークル活動にも専念できたのは、奨学会の皆様のご支援によるものです。大学の4年間は充実したものであり、様々な経験を通して自身も成長することができたと感じています。サークル、バイト、交換留学プログラム、長期インターン、資格取得、社会人団体での活動、1人海外渡航。全学部から講義を受講してみたり、パンフレットを1から作成したり、社長に新規事業案のプレゼンをしたり。反省点も多くありますが、自分の大学生活は充足感で満ちています。

今後は、社会人としていち早く自立し、これまで支えてくださった方々や社会全体に還元・貢献できる人間へと成長していきたい一心です。

未熟な自分のことを温かく支えてくださった皆様に心より感謝を申し上げます。
4年間、ありがとうございました。